

P4-170 各種ヒト癌由来培養細胞株を用いたマウス卵巣高転移モデルの樹立

慶應大

桑原佳子, 阪埜浩司, 小林佑介, 塚崎克己, 青木大輔, 吉村泰典

【目的】転移性卵巣癌は両側性の症例が多く、かつ原発病巣が早期の症例も報告されていることから、特異的に卵巣へ転移する性格を有する癌の存在が示唆されている。また転移性卵巣癌のうち、豊富な粘液を産生する腫瘍性印環細胞と卵巣間質の肉腫様増殖を認めるものは、病理学的に Krukenberg 腫瘍と定義され特徴的である。今日まで、転移性卵巣癌に関する基礎的研究は殆ど報告されていない。そこで我々は、癌の卵巣転移機序について検討するため、種々のヒト癌由来細胞株を用いてマウス卵巣高転移モデルの樹立を試みた。なお本研究は本学医学部病理学教室と共同で行っている。【方法】中分化・低分化胃癌や低分化肺癌など8種類のヒト癌由来細胞株を用いて、腹腔内及び静脈内投与により NOD/SCID マウスへの移植を行い、マウス卵巣への転移性について検討を行った。【成績】NOD/SCID マウスへの腹腔内投与により、4種類の低分化癌細胞株において卵巣転移を認めた。うち1種類は静脈内投与により高率に卵巣転移を来し、かつその卵巣腫瘍組織像においては、Krukenberg 腫瘍を模倣するような卵巣間質の増殖が認められた。また、卵巣転移性を示した上記4種類の細胞株のうち3種類において、E-cadherin の発現が消失していた。【結論】各種ヒト癌由来細胞株について卵巣への転移性を検討し、マウス卵巣高転移モデルを樹立した。また卵巣転移を認めた細胞株には E-cadherin の発現の消失が高率に見られ、卵巣へ特異的に転移する性格に E-cadherin 発現の消失が関与している可能性が示唆された。

P4-171 卵巣癌 TC 療法の投与方法、フォロー体制に関する検討

国立がんセンター中央病院腫瘍内科

齋藤文香, 勝俣範之

【目的】卵巣癌の標準化学療法は、TC 療法 (paclitaxel: T + carboplatin: C) であり、欧米では外来通院が主流である。当院では2006年度まで、卵巣癌に対する TC (tri-weekly) 療法を、一泊二日入院で行ってきた。コース間は、外来受診、血液検査、好中球減少のみでの G-CSF 投与は、ルーチンで行っていない。今回、当院での TC 療法投与方法、フォロー体制についての feasibility について、レトロスペクティブに検討し、TC 療法の外来施行可能性について考察する。【方法】2005年-2006年の当院における卵巣癌手術症例73人のうち、術前化学療法および術後化学療法として TC 療法 (tri-weekly) を施行した37例を対象に、TC 療法の feasibility を、完遂率、減量および延期理由、有害事象などにつき検討した。【成績】患者背景は、年齢中央値57歳(37-73歳)、PS0-1:34例、PS2-3:3例であった。TC 療法は T:175-180mg/m², C:AUC5-6 が投与された。37例計201コース施行された。うち、予定投与コース数の未完遂症例は3例、原因は過敏反応 G2、知覚障害 G3、癌の進行によるものが各1例であった。減量は計17例(46%)で、Tが14例、Cが4例であり、前者は知覚障害 G2-3 が10例、好中球減少による延期が1例、後者は好中球減少による延期が3例、過敏反応が1例であった。投与延期は13例(35%)であった。好中球減少性発熱は2例発症し、両者とも在宅で CPMX の内服で解熱した。G-CSF の投与は、腸閉塞の併発例1例のみで、発熱時の使用はなかった。【結論】当院での TC 療法投与方法 (コース間のルーチンの外来受診、血液検査、G-CSF 投与はしない) についての feasibility が確認された。この結果より、2007年7月から全症例外来にて TC 療法を施行している。

P4-172 Papillary Serous Carcinoma of the peritoneum 7 症例の治療方針における後方視的検討

大阪労災病院

岩宮 正, 正木秀武, 山縣 愛, 小林栄仁, 志岐保彦, 山崎正人

【目的】Papillary Serous Carcinoma of the peritoneum は比較的まれな疾患である (当院では卵巣癌192例のうち7例)。それ故に、症例の集積が難しく、確立した治療方針が定まっていないのが現状である。当科における管理、治療による7症例の経過を報告する。【方法】1997年~2006年において、我々の施設での Papillary Serous Carcinoma of the peritoneum 7 症例につき後方視的に検討する。【成績】症例は、平均年齢59.7歳 (40~72)。腹水細胞診陽性、正常大の卵巣などの所見より、原発不明癌と考え、パクリタキセル及びカルボプラチンを中心とした化学療法を行うことを基本方針とした。術前化学療法が奏功し、optimal surgery を行うことができた症例が4例 (4/7)。初回療法として optimal surgery を行うことが出来た症例が1例 (1/7)。術後、TC 療法を6コース加えた。2症例 (2/7) は、初回化学療法に反応せず、初診後、それぞれ6ヶ月と18ヶ月後に死に至った。手術を行っていない2症例の診断は、1例は試験開腹で、1例は人工肛門造設時について、化学療法が奏効し手術療法、または初回に手術療法を行う事ができたのは、7症例中、5症例。そのうち4症例が寛解となり、無病生存平均期間30.5ヶ月 (7~67) であった。残りの1症例は、術前化学療法、手術、術後化学療法を行ったが、1ヶ月で、傍大動脈リンパ節の腫大を認め、second opinion を希望され、転院となった。【結論】Papillary Serous Carcinoma of the peritoneum は、一般的に予後の悪い疾患と捉えられているが、パクリタキセル及びカルボプラチンを中心とした化学療法と手術療法を組み合わせることにより、無病期間の延長が期待できる。